The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東北古墳時代社会の考古学的研究
Author(s)	菊地, 芳朗
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44127
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【17】

氏　　名	菊　地　芳　朗（きく ち よし お）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　17459　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**東北古墳時代社会の考古学的研究**
論文審査委員	（主査） 助教授　福永　伸哉 （副査） 教　授　都出比呂志　　教　授　梅村　　喬　　助教授　高橋　照彦

論文内容の要旨

巨大な前方後円墳が誕生した古墳時代（3世紀～7世紀）は、日本列島の倭人社会が大きな変容を遂げ、古代律令国家に向かうさまざまな動きを準備した時代である。本論文は、武器、墳墓、集落、手工業生産など多くの分野にわたる考古資料の分析を通じて東北古墳時代社会の特質を明らかにするとともに、古墳文化の北縁地域で生じた諸変化に着目することによって、国家形成史におけるこの時代の位置づけや日本列島の民族形成といった大きな問題にまで説き及んだ意欲作である。論文は3部10章からなる本論に序論と結論を加えた構成で、A4判278頁（400字詰原稿用紙換算約700枚）の分量である。

研究の課題や方法を示した序論に続き、まず第1部では武器類、とりわけ刀剣類の変遷とその背景を古墳時代の全期間にわたって検討する。古墳から出土する鉄製刀剣や装飾付大刀の細部構造、型式編年、出土古墳の特徴などを考察の柱に据え、倭の中央政権が刀剣類の生産や流通をコントロールすることによって、列島各地域に対する影響力を強めていった過程を大きく3時期にわけて段階的にとらえた。そして、東アジア情勢の変化も視野に入れながら、それが古墳時代史全体の時期区分としても適用可能であることを指摘した。

こうした古墳時代史の全体像に対する理解を基礎として、第2部、第3部では東北地方の古墳、集落、手工業生産にかんする分析を深める。まず、第2部では、東北における古墳分布や副葬武器のありかたを詳細に検討し、古墳築造の地域的、時期的な変動が比較的短期間のうちに繰り返し生じたことを明確にした。そして、変化が認められる時期が、3世紀の倭政権成立期、5世紀後葉の雄略期、6世紀後葉の欽明期といった列島規模での大きな変革期と対応していることから、古墳築造は必ずしも東北地方の政治的成熟度を示すような自律的な動きとはいえず、むしろその時々の倭政権の政策を中心とする外的な契機と連動したものであることを主張した。集落と手工業生産に関連する遺跡の検討を行った第3部では、集落の階層化や手工業生産体制が大きく進展する時期と停滞する時期が認められること、それらが古墳築造にみられる変化期と密接に関連することを明らかにした。

以上の考察をふまえて、結論においては、東北古墳時代社会の変化過程の諸段階を提示するとともに、古墳文化の北縁地域ゆえに倭政権との関係がとくに強く反映されるという社会の性格を指摘した。また、このような関係を背景にして、古墳の築かれることのなかった東北地方北部と古墳が展開した南部との地域差がこの時代を通じて顕著になり、日本列島中央部の民族形成にも大きな意味を持ったという理解を示した。そして、列島規模での歴史動向が凝縮して表れたこの地域の社会変化に視点を置き、かつ、都出比呂志氏の提唱する初期国家論の枠組みを一部批判的に援

用しながら、古墳時代は日本列島史上において国家と民族の両者を準備した固有の時代であると位置づけた。

論文審査の結果の要旨

広い範囲で歴史的な枠組みが大きく変わる過渡期においては、しばしば変容の中心地よりも周辺の地域において、その実態をより明瞭にとらえうることがある。本論文は、古墳文化の北縁にあたる東北古墳時代社会の劇的な変化過程とその背景にかんする考察を通じて、わが国の国家形成過程におけるこの地域の特質を解明し、さらには古墳時代そのものの歴史的評価にまで論及したスケールの大きな研究として高く評価できる。

本論文がたんなる東北地域史のレベルを大きく超えて、この時代の全体像をとらえることに成功した大きな理由は、前半部分で古墳出土刀剣類の全国的なありかたを検討し、倭政権による地域把握の展開過程を明確にした上で、東北社会の考察に取り組んだことにある。鉄製刀剣類の製作・流通管理を通じて、倭政権の支配が地域首長からやがて中小古墳の被葬者に対して及んでいくことを明らかにし、これを律令国家的な地域支配にいたる大きな流れの中に位置づけた点などは、刀剣研究としてもきわめて意義のある成果である。

また、研究の基礎となる武器、墳墓、集落、生産遺跡などの多様な考古資料に対する分析の的確さも高く評価できる。刀剣類の詳細な型式学的検討、墳墓・集落・生産遺跡の構造や造営時期を判定する手続きなどは、全国の出土例や研究の現状を十分にふまえた上で行われており、氏の研究者としての安定した力量をうかがわせる。

ただ、多くの斬新な主張を含んだ研究であるだけに、なお検討を要する点も残る。たとえば、装飾付大刀の配布と律令的な冠位制を比較した部分では冠位制にいたる前史をより丁寧に検討する必要があるし、国家形成論にかんする議論においては首長制、初期国家、国家といった社会概念の理論的理解にやや混乱が認められた。

とはいえ、明確な研究視点に基づいて手堅い実証手続きを重ね、地域の考古資料からスケールの大きな議論を展開した本論文は、今後の古墳時代研究の潮流に大きな影響を与えると思われる意欲作である。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい価値を有するものと認定する。